

産直365

さんろくご

2023年
11月3回号
(B週)
立冬

八千代産直

JAつくば市谷田部
産直部会
(茨城県)

サボファーム旭
(千葉県)
ほなわか
葉菜野果産直
(茨城県)

特集

産直産地の 連携プレー!

サンファーム
アップルファーム
さみず
青木農園
(長野県)

互いの知見を持ち寄って
より高いレベルへ

「そつちは雨降った？ こつちは全然」
「うちもだよ。作業がすすまないね」
「今度この品種を作ろうと思うんだけど、
どう？」

「ちよつとくせがある品種ですね。うちで
気を付けてるのは……」

畑のこと、品種のこと、経営からプライ
ベートまで、話に花を咲かせる生産者た
ち。パルシステムの産直産地の間では、古
くからおなじみの光景です。一般的に、農
家の作付計画や、技術・経験は、いわば門外
不出の「企業秘密」。しかし産直産地ではそ
れらを包み隠さず、共有してきました。

この関係は数十年前、関東近郊産地によ
る「支え合い」と「目合わせ」から始まりま
した。当時、右肩上がりが増えゆく注文を、
産地ごとで受けきるには限界がきてい
ました。加えて、基本の決まりはあれど、
品質のばらつきも問題に。そこで近場の
産地同士が手を結び、「近郊産地」という単
位で組合員の声にこたえることにしたの
です。

どこかが不作ならみんなで支え、一人ひ
とりの技術はみんなの技術に——そうし
た協力体制はやがて、地域や作物ごとの
「部会」という組織になりました。今もより
高いレベルの農業をめざして、生産者は知
識・経験をつまびらかに共有しています。

ひとりの生産者、ひとつの産地で試せる
技術には、どうしても限界があります。と
くに一年に一度しか収穫できない作物は、
10年続けても10回しか試すことができま
せん。それでも10人集まれば、1年で10年
分の知見。失敗を繰り返しながら積み上げ
た経験値は今、産直産地みんなの財産とな
り、深まった絆とともに次世代へ引き継が
れています。

今回は、そうしてバトンパスを受けてつ
ながり続ける、3組7名の生産者を紹介し
ます。

「ライバルじゃないから何だって話せる」

「虫が全然いないね! やっぱ旭市と違うなあ」——9月頭 塙正樹さんのトマト畑を訪れた金谷雅幸さんは、青々とした樹々に興味津々。ハウスの中を歩きながらトマトの生育について語るふたりに、産地を超えたつながりを聞きました。

——おふたりはプライベートでゴルフにも行く仲だとか伺いましたが、第一印象を覚えていますか。

塙 僕が就農したのは30歳くらいなんですけど、そのとき金谷さんはもうバリバリにやっています。親父の代わりで会議に行ったりと、同年代の人がもう第一線でやっていると衝撃を受けました。

金谷 俺は付き合いとしては、正樹くんのお父さんとのほうが長いんですけど、向こうも「金谷さんのせいかと、よくしてくれて。」

塙 仲が深まったきっかけは、パルシステムが開いてくれた合宿ですね。若手を集めて研修と交流会をしても、なつかしいな。

——年齢も近く、お互いにトマトを作っていますが、ライバル視することはなかったのでしょうか。

金谷 農家はだいたい、「条件」が全然違うとライバルにはならないんですよ。正樹くんはトマトだけを専らでやっています。規模も大きいけど、俺は春の育てやすいときだけだし面積も少ない。経営・設備は絶対にかわらないけど、まあ俺は味で勝負だから! 正樹くんだって「金谷さんの

トマトはおいしくて当たり前」って思っているでしょ?

塙 否定はしません(笑)。僕は技術もまだまだですし、規模も上には上がっているからなあ。今のコスト高ではこれ以上の設備投資も難しいし、味でも差別化できるようにならないとな、と最近では思っています。

——先ほどハウス内を見て、金谷さんが「旭市にいる虫が全然いないとおっしゃっていましたが、気候や土の条件も異なりますか。」

塙 土壌は全然違いますね。同じ関東でも、うちは黒ボク土で、金谷さんのところは砂地です。

金谷 砂地だといわゆる「ふかふかの土」なんて絶対につれないんですよ。最初は苦労したなあ、一般論にならないで土づくりをしても全然うまくいかないし、親父は「俺が教えたらしにならないから自分で調べろ」というタイプだし。近くの生産者に聞きに行ったりして、砂地に合う栽培方法を何度も試行錯誤しました。

塙 僕も親父にはあまり教わらなかったかな。今は新しい技術に関しては自分のほうが知識はあるけど、長年の勘というか、「樹を見る目」だけは親父にはかかわらないですね。

金谷 昔の人はデータじゃなくて樹を見て育てるから、経験値が違うよね。データといえば、俺はやってないけど、「環境制御システム」を使っている若手でデータを共有し合っているんですよ?

塙 水や温度、二酸化炭素の管理的な

んかを見せ合ってますね。冬場のトマトを作る時に必要な技術なんですけど、これがなかなか大変で、難しい。みんなもそこそこ勉強しててますよ。失敗も含めて共有して、よりよい方法を探っています。

——「近郊産地」は本当に何でも見せ合える仲なんですか。

金谷 今後は全国で、情報共有の仕組みがでんないかなというのも考えています。パルシステムの生産者は全国各地にすごい人がいるので。

塙 できるようにするといっていますね。気候変動で毎年のように、関東では見たことないような病気や害虫が出てくるから。

金谷 もちろん九州や北海道で有効な技術が、こっちで有効とも限らない。でもほかの地域の取り組みを知ることが、「次」につながるんじゃないかと思うんです。それに条件が違うからこそ、腹を割って話せるということもありませんから。

(写真/大岩里真文/西谷真実)



きなり 289
きなりセレクト 341894
トマト 500g 498円(税込538円)
トマトの赤は、サラダには欠かせない彩り。人気も高く、産地リレーで通年お届けします。



きなり 285
きなりセレクト 341908
ミニトマト 130g 198円(税込214円)
付け合わせやサラダの彩りなどに。人気の秘密はほどよい酸味と糖度のある味のよさ。

サドファーム旭 (千葉県)

金谷 雅幸さん

千葉県旭市に拠点を置くサンドファーム旭では、トマト・きゅうり・ミニトマトなど、砂地を生かしたハウス栽培が中心。金谷さんは組織の代表を務めながら、「パルシステム生産者・消費者協議会」の生産者幹事としても活動。全国各地の生産者とも交流もっています。

ほなやの 葉菜野果産直 (茨城県)

塙 正樹さん

葉菜野果産直は、茨城県の中央部に位置する茨城町が拠点。豊かな土壌で葉菜、根菜、果菜を幅広く手掛ける産地です。塙さんは父親の代からトマトひと筋で、ほぼ1年を通してトマト出荷。現在は「パルシステム生産者・消費者協議会」では野菜部会の部長も務めます。



「このつながりも親父たちがくれた財産」

八千代産直 (茨城県)

坂入 清史さん

茨城県西部に位置する八千代産直では、白菜やレタスなど葉物のほか、なす、ピーマンなど年間さまざまな作物を栽培。今年6月には「公開確認会」も開催しました。坂入さんは28歳で運送業から転身して就農。父・一巳(かずみ)さんが始めた「エコ・チャレンジ」栽培を受け継いで、多品目栽培に取り組んでいます。



JAつくば市谷田部 産直部会 (茨城県)

沼尻 務さん

JAつくば市谷田部産直部会は、茨城県南部のつくば市に位置。野菜のほか、きのこと類や米など、幅広く生産しています。沼尻さんは父親の代から、野菜を少量多品目のセットでお届けする「グリーンボックス」を担当。定番野菜からめずらしい野菜まで、20種を超える作物を手掛けている。

関東近郊産地で秋冬野菜の準備がすすむ、9月上旬。JAつくば市谷田部産直部会」の生産者 沼尻務さんの畑を、同じく茨城県にある「八千代産直」の生産者 坂入清史さんが訪ねました。互いに多品目を手掛けるふたりならではの「連携」を聞きました。

——おふたりは日ごろからよく連絡を取り合う仲と伺いました。どんな連絡をすることが多いのでしょうか。

沼尻 愚痴かな(笑)。というのは半分冗談で、やっぱり仕事の話が多いね。この夏は暑くて連絡取ってる暇もなかったけど、最近の天候は作物にも人にも容赦なくて、まいっちゃうよ。

坂入 うちは作業が追いついていない。高温なうえに雨不足で土が乾いて、植えられない。気候変動の影響で、毎年同じように作物を作るのが本当に難しくなっているなと思えますね。害虫の発生も増えてるし。

沼尻 俺らは同じような作物を作っているし、気候条件もほぼ同じだから、出る病気や虫も似てる。坂入くんのところでは病気が出たらうちでも出る可能性が高いから、「じゃあ予防薬使っとくか」という感じで情報がすごく役に立つ。とくに「エコ・チャレンジ」栽培だと使える農薬や回数が決まっているから、出てから対処するよりも適切なタイミングでの「予防」がカギなんだよ。

坂入 近年は病虫害のリスクが高まっているので、会議などほかの生産者が集まる場所でも、もっと農業の話をしていよねと沼尻さんとよく話しています。

沼尻 どんな薬をどのタイミングで使って、どれくらい効果があるのか。そういうのは産地内での話だけじゃ足りないし、産地や人によって情報源や仕入れ先も違うから、外からの情報をもっと入れていきたいよね。

——個々の関係だけでなく、「近郊産地」としてのつながりも強いんですよ。仲間と協力して実践していることもありますか。

沼尻 農法はいろいろ試しているよ。坂入くんのところではやってるIPM(※1)の話を聞いて、今なすの近くにはオクラを植えています。

坂入 うちも沼尻さんから聞いて、コンパニオンプランツ(※2)でマリーゴールドを植えていますね。

沼尻 近郊産地は隠し事なしの気安い関係。誰かの畑に行つて気になるものがあれば、すぐ「これは何?」って聞ける感じ。

坂入 そうですね。気軽に話せる仲間がなかったら、俺はここまで続けられなかったかも。

——沼尻さんと坂入さんは、親世代が「産直初代」ですよ。受け継いでいる「教え」はありますか。

坂入 うちの場合は教えというか、「組織を安定して運営させるために、俺は多品目をやってるんだ」と親父からよく聞きました。何が不作業供給過多になっても、ほかの品目でカバーできるように。

沼尻 谷田部の生産者も、基本的にメインの作物とサブの作物をもつようにしてる。とくに葉物は保存がきかないからね。ただ、俺らほど多品目はあんまりないな。

坂入 多品目って広く浅く知識が必要だけど、スペシャリストになれないんですよ。近郊産地で集まるときも、ひとつの品目での深い話はないのがちょっととかしい。そういう意味でも、沼尻さんとは話がしやすいですね。

沼尻 でも、坂入くんは「もうかる野菜、何?」っていつも聞いているんだけど、それだけは教えてくれないんだよ。

坂入 教えないんじゃないよ、ないんですよ(笑)。でも、もうかることは

エコチャレンジ

特別価格

コトコト 136034
きなり 266
きなりセレクト 341924
エコ・レタス 1個 158円(税込171円)

コトコト 312
きなり 277
きなりセレクト 342009
エコ・白菜(カット) 1/2カット 138円(税込149円)

※1「総合的病害虫・雑草管理」。天敵昆虫などさまざまな手法を組み合わせて病害虫や雑草の対策をすることで、化学合成農薬の削減につながる取り組み。
※2 作物の近くに植えることで、病害虫や雑草の抑制などに効果を発揮する植物のこと。

(写真/山本尚明、文/西谷真実)

削減目標農薬を原則不使用。環境に配慮した農業を進めます。サラダだけでなく、炒め物やスープに入れてもおいしい。

北信濃の仲間と 成功も失敗もわかち合って

長野県にある3つの産地で構成する「北信濃りんご会議」。9月上旬、早生種の収穫が始まりました。りんご畑では、生産者たちがルーペを片手に話し込んでいます。これも、北信濃の連携のひとつなのだから。りんご談義で盛り上がる3産地の代表に、話を伺いました。

——「北信濃りんご会議」はどのような活動をしているのでしょうか？

下川 最近は栽培技術の交流が中心だね。たとえばダニの問題。3産地のなかで一番標高が低いのが私たちサンファームなんです。気温が高いので害虫が発生しやすく、最初に問題が起こりやすい。だからおすすめの方法をダニ対策技術を教えてもらって、試していますよ。

山下 今後さらに気温が上がってけば、サンファームが直面している問題は10年後、うちや青木農園が抱える問題なんです。さみずでは、北信濃りんご会議で得た情報を取り入れて栽培体系を少しずつ変えています。

青木 サンファームは私たちの先を行く存在だね。「エコ・チャレンジ」栽培は限られた農薬の使用回数のおかげで、どうやりくりしていくか複合的に考えてないといけない。「何をしようかはもちろん、「いつ」使うかも大事。それには近隣で、同じ栽培方法で作っている人たちの情報が欠かせないわけ。

下川 失敗も「これは絶対にやっちゃだめだ！」って伝えている(笑)。みんな

よき相談相手ですよ。互いに、失敗も成功も持ち寄って議論していますね。

山下 2014年には、物流を一本化しました。青木農園にはうちにりんごを持ってきてもらっています。出荷トラックはまずサンファームに寄ってりんごを積み込み、そのあとうちの出荷場に寄って、2産地ぶんのりんごを積んで、パルシステムに出荷する流れです。

青木 これで物流コストはかなり削減できてよな。最近は運送費もどんどん高くなっていくから、いかに抑えるかがとても大事なの。

——2019年10月、台風19号による洪水被害でもみなさんの連携があったと伺っています。

下川 サンファームの近くの千曲川が氾濫して、私を含め生産者8世帯の自宅や畑が浸水したんです。場所によっては50cmもの泥が堆積しました。そのときみんなの力を借りたから、今のサンファームがある。ふたりは泥が堆積した保管庫から、りんごを入れるコンテナ箱を数百単位で運び出してきて、持ち帰って洗って、また戻してくれて。

青木 俺たちの商売道具だからね。泥だらけになったら使い物にならないじゃん。

山下 家や畑から泥をかき出す作業も手伝いたかったけど、秋は収穫最盛期。自分たちの地域の生産者と分担しながら、できる範囲でやらしてもらった感じです。

青木 あの年はりんごの出来がよ

かったよね。

山下 そうそう。泥をかぶったりりんごが入っている箱もあって。そのりんごの廃棄までやったんですけど……同じりんご農家だからできたことかもしれない。大切に育てた出荷直前のりんご。物理的に重いだけじゃなかったですね。下川さんたちにとっては、相当厳しいもんだったと思いますよ。

下川 自分たちだけではどうしようもなかったから、本当に助けてもらいました。先輩たちが築き上げたチームワークというか、強いつながりを感じましたね。

——今後3産地で挑戦したいことはありますか？

山下 今もやっていますが今後さらに、長野生まれの品種に取り組んでいけたらと思っていますね。全国的にみれば生産量は少なくても、長野らしさがあるりんごを。

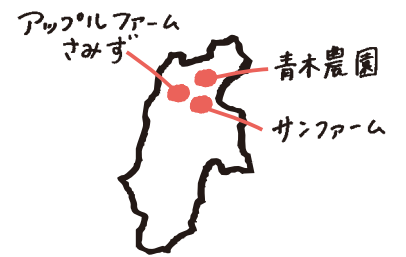
青木 今年は「シナノドルチェ」を、「北信濃のエコりんご」と冠して出荷したな。ほかにも、最近はまだ暑い8月に収穫できる「シナノリップ」なんかも出てきたね。

下川 今年は台風こそ通らなかったけど、夏は酷暑で雨が極端に少なく、樹や実に大きなダメージが出た大変な年でした。こういう異常気象に対応していくためにも、これからもみんな情報交換をしながらりんごを作っていきますよ。

(写真/深澤慎平、文/小方恵美)

北信濃りんご会議

農薬削減でりんごを栽培する長野県北部の3産地で、2003年に結成。栽培技術の交流のほか、ギフト商品開発などにも取り組んでいます。



サンファーム

(長野県)

下川 英紀さん

サンファームは長野県長野市に拠点を置き、8軒の生産者が所属。昨年設立30周年を迎えました。下川さんは農薬の販売を行う会社に勤務後、31歳で就農。昨年代表を務めています。

アップルファーム

さみず (長野県)

山下一樹さん

長野県飯綱町に拠点を置くアップルファームさみずには24軒が所属。ベテランだけでなく、若手や女性も活躍しています。山下さんは2015年に父親から代表を引き継ぎ、経営の傍ら、現在は約50品種のりんごを栽培しています。

青木農園

(長野県)

青木 賢一さん

青木農園は志賀高原を擁する長野県山ノ内町が拠点。なだらかな扇状地形に果樹畑が広がります。青木さんは父親の代から農薬削減を始め、現在はりんごやぶどうの栽培に取り組んでいます。



葉の裏からダニを採取し、専用ルーペで観察する3人。下川さん(中央)は最近、山下さん(右)おすすめのダニ対策資材を取り入れたそう。寒天の粉を活用し、悪さをするダニを予防。「検証圃場で試したらすぐよかったですので、来年はとことんやりたい!」(下川さん談)



商品ポイント +10

今限り



さみず(長野)・青木(長野)・サンファーム(長野)

136361

北信濃の糖度保証エコりんご(ふじ)

900g 598円(税込646円)

北信濃の3産地より糖度13度以上のりんごをお届け。甘さ酸味のバランスがよい定番の品種です。3-4玉でお届け。

